

英語記述文法の原理と応用*

一周辺的言語現象の扱いをめぐって(1)

八 木 克 正**

本稿の目的

本稿は、筆者のよって立つ言語研究の基本的な考え方を明らかにすることと、その基本的な立場から、英語という言語の中で、周辺的な現象と一般性をもった現象とをどう関連づけて説明するかを総合的に明らかにすることにある。周辺的な現象とは、最近盛んに議論されている「結果構文」(resultative construction)「再帰構文」(self-construction)「way 構文」(way-construction)や、それ以外に例外的な現象と考えられるさまざまな現象のことを言う。

言語学の研究はさまざまな方法でおこなうことができる。さまざまな方法といっても、経験科学である言語学は、研究報告として出される場合、着想・データ・理論がうまくかみ合っているという前提によることは言うまでもない。今日有力な Langacker を中心とした認知言語学 (cognitive linguistics)、生成文法 (generative grammar)、B. Levin などの語彙意味論 (lexical semantics)、Jackedoff の概念意味論 (conceptual semantics)、Halliday, Fawcett などを中心とする体系機能文法 (systemic-functional grammar)、あるいは Kuno の機能文法 (functional grammar)、R. Hudson のワード・グラマー (word grammar)、語用論 (pragmatics) の中でも D. Sperber と D. Wilson の関連性理論 (relevance theory)、関係文法 (relational grammar) や、あ

るいは、もっとマイナーな “topoi” の理論¹⁾など、どれを選んでもそれぞれ魅力があるのだから、よって立つ理論に巡り会うに困ることはない。ただ、コミットするべく選んだ理論の枠組みの中ですでに誰かが取り上げた着想もデータも借りてくるといふことになる、少し事情が異なる。研究の名に値するのは、少なくとも、理論の発展修正に貢献する、新しい事実を提示する、新しい事実で理論を修正する、新しい着眼点を提示するといったものでなければならない。

このような観点から見ると、小論は、上述のどの理論にも組みしないという特徴があること、どの理論にも組みしない独自の言語の研究方法を示すこと、新しい言語事実あるいはすでに知られている言語事実をこの新しい研究方法から説明をし直すことを目的としているという点で、独自性をもっていると考える。

英語を研究するという事は、英語の仕組みを諸言語のひとつとして言語の普遍性・体系性の研究 (これを「言語理論派」と言うことにする) をする立場と、英語を母語としないものが英語の諸現象の中で十分解っていない部分を理解するための研究 (これを「個別言語派」と言うことにする) がある。われわれは、英語を理解するうえで英語を母語とする人たちにはない難しさを感じる。その難しい点を明らかにしてそれを説明するためには、上にあげたさまざまな理論とは違った別の独自の理論と方法があつてしかるべきである。英語を研究するこの2つの別々の立場がしばしば混同

辞書や corpus の略語は八木 (1996) を参照されたい。

1) Anscombe などのフランスの言語学者グループがとなえる理論。八木 (1997) は近の Anscombe の論文を日本語訳したものである。

*キーワード：周辺的言語現象、データ中心のアプローチ、個別言語派

**関西学院大学社会学部教授

されて、「言語理論派」でなければならないとか「個別言語派」が一段低く見られるということがある。どちらが高尚であるかということよりも、それぞれ立場が違うということ認識することの必要性と、それぞれから学ぶことがあるということの認識の必要性を本稿から読みとっていただきたい。「個別言語派」の研究を見て、言語理論がないなどというのは、キリンの絵をみてこの絵は象をえがいていないと言うのと同じである。

後に明らかにするが、筆者の立場は意味を基礎においた統語研究である。近年意味を主体にした言語研究の潮流がいくつか見られる。独自の理論的展開をする Jackendoff (1983, 1990)、Wierzbicka (1988)、Dixon (1991) の他に、生成意味論の再帰ともみなされる Seuren (1996) などがそうである。あるいは Quirk *et al.* (1985) は意味を基本にとらえた極めて広範囲の英語の分析と説明と言うこともできる。筆者の立場は、これらのどの理論あるいは Quirk *et al.* (1985) の枠組みにも組み込まないと言いつつも、もちろんこういう流れに影響されたものである。統語構造の中心をなしている部分と比較して周辺的な言語現象の説明には、本稿のような独自の立場が必要である。そのような本論に入る前に、まずデータと理論をどう関連づけるか、既成の理論になぜ組み込まないかを述べることから始めよう。

第一章 原理編—基本的な立場

1 理論とデータ

生成文法の出現以来、理論先行 (theory-oriented) の研究が主流となった。それ以前のアメリカ構造言語学に対する反省によるものである。データを編集して分類するという手法が主体であったアメリカ構造言語学の研究方法は、Joos によって編集された論文 (Joos (ed.) 1957) をみれば一目瞭然であるが、生成文法の洗礼を受けた言語学者の目には知的興味をかき立てるものは少ない。同時に、Jespersen, Curme, Kruisinga, Poutsma などの入念な資料収集と分類整理、深い洞察を示したいわゆる科学的な伝統文法でも、やはり組織的な説明という点では、今考えると不満が生じるのもやむを得ないことである。このような

過去の言語研究のあり方に反省を加えたという点だけを見ても Chomsky の存在の大きさの認識を新たにする。

しかしながら一方で、理論先行でなければならないという考え方が、現実に使われているデータの軽視につながる結果を生んだことも事実である。生成文法で関係詞が議論されると関係詞に、また数量詞が議論されると数量詞に、*wh*-words の移動が問題になると研究者全体の関心はその研究に向かうという経緯があった。そのような議論の中で使われてきたデータの多くはいわゆる実例ではなく、単純化された極めて限られた現象に関わるものが多かった。英語に限らず、どの言語でも、そういうもの以外に興味ある現象は数限りなく存在している。特定の理論にコミットすると、その時の “hot corner” にどうしてもコミットせざるを得ないことが往々にしてある。このような事実は理論の確立、修正といった面で重要な議論であることは論をまたないが、もともと英語という言語のさまざまな現象に関心を抱いてきた研究者には不満が残る。これが筆者の既成の理論離れの理由のひとつである。

言語学は、すべて言語普遍的な側面の研究に向かわなければならないのだろうか。もちろん筆者の答えは No である。言語学の課題は人が言語を修得するメカニズムの研究であるという設定をする研究者と、個別の言語に関心をもつ研究者があることを正しく認識しなければならない。構造言語学が盛んで、わが国の英語教育の中で oral approach が英語教育界を席卷した感のある時期 (主に1960年代) があった。生成文法が入って来るともう生成文法 (1960年代後半当時、構造言語学とあわせて新言語学と呼ばれていた) でなければ言語学でないといった風潮も往々にしてみられた。このような傾向に対する疑問も、筆者が既成の特定の理論にコミットしない理由のひとつである。

ひるがえって、コンピュータの発達とあいまって corpus linguistics が盛んになってきた。実際に使用された言語のデータを集積し、それを言語研究の基本に据える。ある意味では理論先行と正反対の方向であるような印象を与えるが、筆者は corpus linguistics とは、言語研究のデータを提

供するのが主たる役割であって、それ自体が言語研究のひとつの方向とは考えない。しかし、データを容易に手に入れることができるようになってから、データ先行 (data-oriented) の研究がしやすくなったことは事実である。外国語として英語を研究する場合、どうしてもデータ収集に時間がかかった。ただ、corpus の利用によって大量のデータが手に入ることから、それをどう処理するかが大きな問題になる。本質的な部分とそうでない部分を見分け、本質的な部分をどう処理するか、非本質的な部分を本質的な部分とどう関連づけるかという観点がないと、統計処理的な方向に向ってしまい、本質にせまるのが困難になる。統計処理で解決できる問題とそうでない部分がある。till と until がどういう割合で口語英語に現れ、また書き言葉に現れるかといったことは、統計処理によってしかわからない。ただ、出現の割合が仮にわかったとしても、それほど発展性のある研究にはならないように思われるが。

2 言語研究の方法

言語研究が科学的であるためには、事実の入念な観察、そこから導かれる仮説、事実に基づく仮説の検証、論証の提示というプロセスをたどるのが原則である。

私は次のような表現をよく耳にする。

- (1) 3時30分より二階スタジオにてエアロビクス・ビギナーのレッスンを開始いたします。
参加ご希望の会員さまは、二階スタジオまでお集まり下さい。

私はこの「まで」に違和感をもつ。それはなぜか、もっとわかりやすい例を使ってみよう。

- (2) 学生のみなさんはグラウンドまで集まって下さい。

このような簡単な事実に関する限り、おそらく動詞語幹「集ま」の前にくる副助詞の種類と頻度を調べ、「まで」は「へ」より生起回数が少ないといった説明では満足しないだろう。おそらく「へ」が普通で、何かの理由で「まで」が入り込んだのではないか、という想定をもつであろう。これが仮説である。ほかのデータと比較してみよう。

- (3) a. 二階スタジオへお越しください。
b. 二階スタジオへおいでください。

- c. 二階スタジオへ来て下さい。
d. 二階スタジオへ来なさい。
e. 二階スタジオへ来い。

これらはいずれも可能な表現のように思えるが、c, d, e が自然な感じがする。これに対して、

- (4) a. 二階スタジオまでお越しください。
b. 二階スタジオまでおいでください。
c. 二階スタジオまで来て下さい。
d. 二階スタジオまで来なさい。
e. 二階スタジオまで来い。

では、a, b, c が自然な感じがする。「くる」とその異形では「へ」「まで」のどちらも使えるが、スピーチレベルの違いが認められる。

さらに、「へ」は最終的な目的地であるのに対して、「まで」はそれより先へゆく可能性を含みながらもとりあえず、といった感じである。このことが「へ」と「まで」のスピーチレベルの違いに反映しているのであろう。また、「集まる」はあることから別のところへの移動を含意しないから、移動を表す「へ」も「まで」も不適當な結合をなす。場所を表す「に」が適當になるのである。

従って(1)は「二階スタジオまでおいで下さい」と「二階スタジオにお集まり下さい」とが混交したものであることがわかる。この種の日本語の誤用の例は、國広哲弥『日本語誤用慣用小辞典』(正・続) (講談社現代新書) に詳しい。

アメリカ構造言語学に対する批判のもっとも基本的な論点のひとつは、事実の羅列に終始することが多く、集積された事実のなかにひそむ規則性の発見といった面での、真の意味での知的な営みが不十分であったことにある。近年の corpus を利用した言語研究も、単なる事実の集積に終わることなく、大量のデータに埋没せず、真に科学的な、さまざまな言語現象の説明に向かう必要がある。

いずれにしても、何を研究対象にするか、着想をどこから得るかが重要な問題である。着想を得てデータを集積し、仮説をたててそれを検証することが corpus を利用することによって容易になる。

3 言語研究の価値と評価

一般的に、生成文法、認知意味論、語彙意味論、

ワードグラマーなどといった特定の言語理論あるいは言語研究の潮流の枠組みのどれを選ぶかということから言語学への入門が始まるという認識がある。しかしながら、もし仮にこれらの言語理論の枠組みの中で行った研究しか科学的な研究でないということになるならば、入門期はただひたすら言語理論の学習に費やさなければならないということになる。もちろん特定の理論を勉強してゆく中でその言語理論を何らかの形で修正あるいはデータの追加、反例を見つけることから研究がスタートするという考え方もある。

私はこのような考え方はとらない。先人の研究に学ぶことの重要性は言うまでもないが、先人の研究に学ぶということは必ずしも科学的とされる(すなわち establishment と認知された)特定の言語理論の枠組みの中に自分をおくことを意味しない。この認識は重要であると思う。特定の言語理論の枠組みは、それが establishment として認知されるのは相対的なものであり、その枠組みはいずれは修正を受け、いつか価値すら疑われる時がくる。科学の進歩とはそういうものでなければならない。今真理とされるものが真理であり続けるのは、それが実は真理ではなかったということが証明されるまでである。ひとつの言語理論に完全にコミットしているとその理論の枠組みと方法全体が否定されるときが来て、方向を見失うということが起こらないとも限らない。アメリカ構造言語学がその例である。さいわいこの時は多くの人が生成文法に移行していったが。

ここで言語理論と方法論の関係を考えてみよう。一般に言語に関する理論は、基本的な言語に対する認識の仕方と、それと密接に関連したことからであるが、言語のどの様相を説明しようとするかという目標に関する部分と、具体的な研究の方法に関する部分がある。言語の研究はさまざまな方法でなされるべきもので、方法を必ずしもその言語理論の目標などとは関係なく利用することができる。

Sausseure の唱えた「構造主義」的な言語の捉え方は現在の言語研究で構造主義を標榜しなくとも現代英語の中でその仕組みを考える場合には構造主義的な立場に立たざるをえない。それほど普遍的な価値をもった思想である。生成文法で明ら

かにされた深層構造 (D Structure) と表層構造 (S Structure) といった言語の捉え方も、人によって評価が異なるが、普遍的な価値をもつ思想であると思う。X-bar 理論も普遍的な価値をもつものと考えることができる。このような思想はどの言語理論に立とうが価値を失わないものと思う。

科学的に価値のある研究は、新しい理論の構築といった壮大なものから、すでに存在する特定理論への修正や変更をせまるといった新しい貢献、すでに知られている事実の特定理論の枠組み内での新たな説明・解釈、あるいは、全く既存の言語理論とはかかわりなく、それまで知られていなかった新しい事実の発見あるいは新たな解釈を加えるというような、言語研究の世界に何らかの新たな知見をもたらすものでなければならない。

特定のデータバンクからたとえば get の受動形と be の受動形のような特定の現象を数え上げることが研究の中心であるならば、だれが数えても答えは同じである。先にもふれたが、LOB から till と until のすべてを抜き出して数を比べるということはどれほどの意味があるのだろうか。仮に話言葉、書き言葉やその他の細分化された分野ごとの頻度を比べてみて、スピーチレベルの低い分野では till が多く、スピーチレベルの高い分野では until の方が多いということがわかったとして、それ以上の発展性はないであろう。そのことはむだとは言わないが、それほど展望のもてる研究の端緒になると思えず、発展性という点からはなほだ先の見えない研究といわざるをえない。corpus linguistics の統計に埋没する研究にはそのような危険性がある。

筆者は最近「語法研究」を言い換えて「現代英語の記述的研究」と言うことがあるが、この種の先進的な研究をみても、大げさに言えばそれぞれの中で一つの宇宙を構成している。特定の言語理論に拘泥せず、きわめて自由に発想し優れた知見を提出しているものがある。例えば『英語基本動詞辞典』(研究社出版、1981)には、それまでの研究成果の寄せ集めではないすぐれた知見が数多く見られる。ただ、首尾一貫した論理の展開の中に、突如借り物の理論あるいは理論の断片を利用するようなことがある。これは避けなければな

らない。これが語法研究の価値を低める原因のひとつになっている。しかしながら一般的に研究をよく理解せず、また理解しようともせずになされる批判は、実は批判ではなく揶揄である。

4 着想をどこから得るか

先にも述べたが、巨大なコーパスが利用できる時代になった。OED2, AHD3などの辞書がCD-ROMになって利用できる。インターネットによって海外の言語学者の意見を問うたり、インフォマントの情報もコンピュータ上で得ることができる。このように便利な道具と方法はいつでも使える状態にある。次の問題は、どんなデータをどんな目的で得るかということである。すなわち、着想である。データの収集も目的がはっきりしていないとデータが多ければ多いほど整理が困難になり、收拾がつかなくなる。

言語学的な研究は料理に似ている。清潔な調理場に最新式の調理器具が備えてある。だがこれだけでは何も始まらない。新鮮な食材と、何をおいても意欲的で最新の調理の技術を身につけた調理人が必要である。新鮮な食材は、みずから市場に出向いて吟味し手に入れて来なければならない。

研究の技術は、特定の言語理論から直接借りてくこともできるし、みずから開発することもできる。しかし、一般的には技術は研究をする中で磨かれてゆくものである。新鮮な食材は市場で買ってくることができるし、技術は時間をかけて学習することから生まれてくる。だが、着想は買ってくることはできない。

着想をどこから得るか。われわれが英語のさまざまな事実を知るのには、書物、雑誌、放送などといったものであるが、ただ漫然とこれらのものを読んだり聞いたりしているだけでは何の問題意識もつかんでくることはない。それではどこから研究の着想を得ることができるだろうか。

一つの方法として、ただ闇雲にデータを集めていけばそのうち問題が浮き彫りになるだろうという考え方がある。たとえば特定のデータバンクの中から仮定法あるいは、進行形の動詞をすべて抜き出して、それを分類し文献の記述と比較するという方法がある。この方法は一般的に時間がかかり、データに埋没し、所期の目的を達成すること

ができなくなる可能性がある。問題意識がないままデータを集めることから開始するというの一般的に勧めることのできる方法ではない。

今言語学の世界で何が問題になっているのかを知る方法は何といっても各種の論文雑誌である。これらの中に興味を引くテーマを見いだすことは困難ではないであろう。ただ問題は、興味をもったテーマについて雑誌論文ですでに語り尽くされている場合があることである。改良にしか議論の余地がない場合が多い。

独自の着想から出発する研究はどのようにして可能になるのだろうか。これに対する答えはない。独自の着想を得る方法はそれぞれ独自に開発しなければならない。

5 データをどこから得るか

たとえば、ある研究がおもなデータを新聞英語からとっているからデータに偏りがあるという批判がある。しかし、このような批判は無意味である。この批判が意味をもつためには、新聞以外の別なデータを利用して同じ言語現象を調査し、そこで別な結論導き出すことが必要である。ある研究が「もっぱらジャーナリズムから言語の資料を得ている」という批判をする人は、ジャーナリズムの英語をデータとすることが英語の本質的な研究にどれほど障害になるのかを、事実でもって証明する義務を負う。新聞英語には独特のスタイルがあることは承知しているが、それが言語の本質的な研究にどれほどのバイアスを与えるのかは証明されていない。

Jespersenなどの伝統文法での英語の研究は主として文学作品を利用してきた。口語的な英語の研究をおろそかにしてきたということは言えるだろうが、だからといってJespersenの研究の価値をいささかも減じることはない。口語的な英語の研究が欠けていると思う研究者は自らその研究に向かうことを勧めたい。

英語のある現象を説明するために、データをたとえば書き言葉、話し言葉、英米の差、レジスター、書き言葉でも堅苦しい場合、そうでない場合、親しい間柄の手紙の場合などなどすべての中からデータを集めなければ研究成果をまとめることができないという主張をする人はそのような研

究を自ら行い、十分な成果をみせるべきである。データに偏りがあるという主張は、データに偏りがあるために英語の本質的な研究にどれほどの支障があったかを示す義務がある。

データをどこから得るかということは言語の本質的な研究の中では、一定の時期を限って利用する限り大きな問題ではない。新聞の英語や雑誌の英語であるから英語の本質にせまることはできないと言うのは、根拠を示さない限り揶揄に属する批判である。

次に、量は質へ変化するかということを考えてみよう。大量のデータの利用はもちろん corpus の利用で可能になる。corpus linguistics の役割は (i) corpus 構築の方法論と実際の corpus 構築および構築された corpus から必要なデータをどのようにして検索するかという検索ソフトの開発、(ii) 構築された corpus を言語の研究にどのように利用するかという側面がある。もちろん (i) (ii) に関係なく、ただできあがった corpus を利用して本来の言語研究に資するという立場もありえる(ちなみに筆者の立場はこれである)。少なくとも (ii) に関しては、統計調査という新たな可能性を拓いた。量から質への弁証法的な変化を期待するという事は、統計調査が言語の本質的な研究にどれほどの貢献をするかということに問うに等しい。この問いにたいする回答は、結局今日までにどのような研究成果があるかを見る他はない。筆者の研究の中から具体的な例をあげてみよう。

英和辞典ではよく admiration に後続する前置詞として of と for をあげるが、これらがどのような違いがあるのか、それともいつでも入れ替えが可能なのかという疑問が生じて当然であろう。Los Angeles Times on CD-ROM (1994) で admiration を検索すると確かに of/for が後続している例がある。また from の例も1つある。数からいえば of は for の約10倍の頻度である。ここで終われば量は質へ転換していない。of の例を観察してみると A's admiration of B の形のもと B wins/ earns the admiration of A の2つのグループに分けることができる。それぞれ若干の異形をもっているが、それは本質的な議論とは関係がないので今は省いて考える。

すなわち A's admiration of B は A admires B が名詞化変形されたものと言うことができる。それに対して A wins/ earns the admiration of B は B admires A の関係になっている。このような統語的な関係は多くの例をみることによって明らかになる。従来の方法ではとてもこのような認識にいたるまでのデータを得ることは不可能であった。admiration for は基本的に A has (an) admiration for B の形をとっている。

このような考察から、admiration は of をとると「誰かが誰かをほめること」という動的な意味あいが含まれていることがわかる。これに対して for をとる場合は目的語に対する「賞賛の気持ちの対象」を言うことがわかる。

このような観察が得られれば量が質へ変化したと言える。大量のデータを集めそこから法則を導き出すことは容易なことではない。結局は従来の英語学研究と同じく、データを読みとる力と観察力が問われるという点では何ら変わるところはない。データの収集が容易になったが、結局は研究者の研鑽が問われるのである。

大きなデータバンクからデータを得ることができると研究条件をよくしたとは必ずしも言えない部分がある。大量のデータを前にすると、研究者がやろうとまず考えつくことは統計処理である。till と until の頻度を調べ統計処理をすると、何か科学的な研究をしたような錯覚を覚えるであろうことは無理からぬ面がある。

一般的に言語現象は本質的な部分と非本質的な部分が重なった重層的な現れ方をする。表面的には、どの現象が本質的なものでどの現象が本質的でない部分なのかはわからない。また、研究の第一歩はその本質的な部分と周辺的な部分を見分けることにある。

本質的な部分と周辺的な部分の区別がしにくくなるのは、言語が「磨滅」(wear out) することが原因である。ここで言う言語の「磨滅」とは、最初は明確な区別がなされていたものが継続的な使用によって区別があいまになることをいう。この磨滅の現象は以下の具体的な資料の中で数多く出てくる。

6 統語特徴と意味の関係

語順を決める原則や前置詞と名詞との位置関係などの範疇間の関係は明らかに自立的な統語上の規則であるが、個別の語と語の関係まで統語規則がすべて統語論の中で自立的に決定しているわけではない。古典的な Katz & Fodor (1963) の意味論では、個別の語彙項目に、品詞名、自動詞・他動詞の区別といった「統語標識」(syntactic marker)、語彙に共通に見られる意味的な特徴である〈±human〉、〈±animate〉、〈±intentional〉などの「意味標識」(semantic marker)、ひとつひとつの語彙項目のもつ意味特徴である「識別標識」(distinguisher)、連語 (collocation) の可能性を示す「選択制限」(selectional restriction) を与える。このうち、統語標識は個別の語彙項目どうしの関係ではなく、範疇どうしの関係をさし、統語論で扱われる。意味標識は、語彙項目の意味のうち統語関係に反映するもので、これを扱う分野は意味論であるが、語彙項目の意味と統語的な特徴との関係を扱う分野として位置づけ、意味的統語論ということにする。識別標識は、一般的に統語関係に反映しない語彙項目の意味の部分で、辞書学で扱うものとする。このうち特に意味的統語論は、筆者の考える語法研究がもっとも関心をもつ分野である。統語形式は数の限られたものであるが、意味は無限であり、その結果、複数の意味がひとつの統語形式で実現される。一方で、SVOC といった統語形式も意味をもつ。ある表現が容認されるかされないかは、意味の反映である統語特徴が理由である場合と、本来的な統語特徴が理由である場合、さらに、これらの混合した場合がある。

7 統語論の自立と意味

上に統語研究における本稿のよってたつ立場を明らかにした。それは意味を基本にすえるというものであるが、Halliday, Fawcett などの体系機能文法、Langacker の認知意味論とは違って、統語特徴でも意味の反映であるものとそうでないものを認める。すべてが意味から出発するのではなく、統語から出発するが、語のもつ統語特徴によってまずその配列が決定されることは認めておく必要があるというのが筆者の基本的な立場であ

る。

Langacker (1995) をめぐって、日本英語学会 (1996年11月17日) のシンポジウムの形で生成文法の正当性と認知文法の正当性の主張がそれぞれ中島平三、西村義樹の両氏によって行われ、続いて中右実氏と長谷川欣助氏がディスカッサントとしてコメントを述べた。このコメントはいずれも統語関係の自立性と意味の関与の両方を認めるという立場からのものであった。

生成文法の立場に立つ人の中には、

- (5) a. *I believe that John is honest.*
 b. *I believe John to be honest.*

の2つの文の関係づける方法として、(5b) は (5a) の *that* 節の主語 *that* を主節の動詞 *believe* の目的語の位置に繰り上げたという操作を想定する人がある。もちろん抽象的な構造表示のレベルの操作であるが、簡略化した説明と理解されたい。さて、これに対して認知文法では、そもそもこのような2つの文は意味の違うものであって、補文標識の *that* や *to* なども意味をもっていること、*believe* のこの2つの叙述形式がなぜ選択されたかを説明することが必要であり機械的な統語的な関連づけでは説明したことにならないこと、変形操作が加わったとされる2つの文は意味的に違ったものであるといった主張がある。つまり、(5a) と (5b) が意味的に基本的には同じであるか違うかという、意味解釈からして異なった立場に立っていることになる。

もともと基本的な立場は、かたや生成文法の形式主義に対し、認知文法は意味(機能)を出発点とする。もちろん認知文法では深層構造 (D structure) と表層構造 (S structure) の区分は認めないのであるから、平叙文と疑問文、能動文と受動文などを文法規則による mapping を認めることはあり得ない。だから、繰り上げ規則なぞ本来存在しないものなのである。このような認知文法の出発点は Halliday, Fawcett などの体系機能文法にも共通するものである。

本稿の立場はこれらのどちらの立場にも組みするものではなく、範疇どうしの関係といった大きな統語関係は形式的な問題であり、数の限られた統語形式のどれにどの語が当てはめられてゆくかは、語の意味によって決定される意味上の問題で

あると考える。すなわち、古典的な Katz & Fodor の立場に立っていることになる。

8 周辺の現象の分析と説明

周辺の現象はいくつもあるが、近年特に議論されているもののひとつに、結果構文 (resultative construction) というものがある。

(6) He *pressed* the program flat on the table, brushing out the wrinkles.

[W. P. Blyat, *The Exorcist* (1971)]
press という行為とその結果生じた flat という状態が一体となったひとつの構文で表現されている。このような構文の存在はもちろん Jespersen, Curme, Kruisinga といった伝統文法でも論じられてきたし、筆者も Yagi (1977) で論じたことがある。このような構文の論じ方に、生成文法の立場と Levin などの語彙意味論 (lexical semantics) の立場に際だった違いがある。

その違いは、生成文法の立場になった研究者がその構文がどのような構造をしているかを説明するために、二項小節分析 (binary small clause analysis)、混交小節分析 (hybrid small clause analysis)、ternary analysis といったものが提案されている。これらの分析は、the program flat の部分を小節とするか、あるいは the program は press の目的語でもありまた小節の主語でもあるとするか、そのどちらの場合もありえるかという、いかに分析するかでの議論となっている。意味を基礎においた Van Valin (1990: 255) の結果構文の分析も、分析方法の提案である。

これに対して、Levin の「語彙的従属化」(lexical subordination)、Jackendoff (1990) の概念構造を統語構造に写像する (mapping of conceptual structure onto syntactic structure) という考え方を基本とする「概念意味論」(conceptual semantics) は、この結果構文は派生的なもので、別の一般的な構造に何かの条件が加えられた結果生じた構文という捉え方である。

これらの二つの立場を見ても、生成文法の統語中心の立場からの分析は分析的 (analytical) であるのに対し、Levin や Jackendoff は、その構造がいかに生成されたかを説明しようとする生

成的 (generative) な立場に立っていると言うことができる。認知文法の立場からの結果構文の分析は Horita (1995) に見られるが、これも生成的な立場とすることができる。基本的な考え方からすれば、Jackendoff などの立場がより生成文法的とすることができる。この結果構文をどう説明するかは、第2章で詳しく論じることにする。

9 意味と統語特性

上に、意味的な特徴が統語特徴に反映されるということを述べたが、その前提からくる当然の結果として、意味の類似した語は類似した統語的な特徴を示すはずである。ところが、一見その前提に反するような例がある。

9.1 hit / beat

(7) Yagi (1977)

a. He *beat* his wife into submission.

b. *He *hit* his wife into submission.

c. cf. He *hit* his wife until she became submissive.

beat は (7a) のような使役的な構文をとることができるが、hit はできない。(7c) のように分析的な表現をしなければならない。あるいは、意味的に極めて類似した entrap, trap, ensnare, snare のうち snare は使役構文をとれない。

(8) He *entrapped*/ *trapped*/ *ensnare* **snares* her into marrying him.

[Yagi 1977]

9.2 splendid-type の形容詞

また、Quirk *et al.* (1985: 1226)、Declerck (1991: 481) では、

(9) careful, careless, crazy, foolish, greedy, kind, mad, nice, silly, splendid, unwise, wise, wrong

などの語群は形容詞の中で *splendid-type* と言われる、人の性質を表すという意味的に共通の特徴をもち、It is *splendid* of Bob to wait./ Bob was *splendid* to wait. のような構文が可能であると考えられている。ところが、Bob was *splendid* to wait. という文自体が極めてまれな表現と考えられる (cf. Yagi 1997)。careless と careful を比較しても、同じ構文で容認度が異なる (八木1996: 268ff.)。

- (10) a. You were *careless* to leave the door open.

b. ?You were *careful* to lock the door.

このような例は、意味的特徴は必ずしも統語構造に反映しないということの証拠にはならない。逆に、統語構造の違いは、意味特徴を知る上で手がかりになるし、意味分析をより正確にすることができ、結果的に使役構文は意味のどの部分が関与しているかを知ることができる。

beat, entrap, trap, ensnare が使役構文をとるのに対して hit, snare がとれない理由の説明に、前者は〈+causative〉の特徴をもち、後者は〈-causative〉の特徴をもつということは、説明の義務を放棄したに等しい。何らかの働きかけの結果、働きかけを受けた側が何らかの状態の変化を起こすことが想像できるかどうかによって使役の用法が可能かどうか決まる。しかもその結果は後に見るように、kill - dead などのような、明らかな因果関係が存在する場合は結果を明示することは普通ではない。本来使役構文は結果の明示のために生じた構文である。hit はその行為の結果ボールであればどこかへ飛んで行くから into, over... など動的な場所を付加することができるが、結果の状態を表すことはできない。

名詞主語 + be + 形容詞 + to do の型をとる形容詞は、John is hard to convince. のような主観的判断 (subjective judgment)、John is slow to react. のような不完全叙述 (incomplete predication)、Mary is beautiful to look at. のような完全叙述 (complete predication)、I'm glad to see you. のような非現実的原因による感情 (non-actual emotion aroused by a cause) の場合がある。(10b) の容認度が低いのは careful は「完全叙述」、つまり careful は人の永続的な性質を述べているのに対し、careless は特定の行為によって人を一時的に判断するものであることが反映している。careful, careless は単純な反意語ではない。形容詞の分類については Yagi (1997a) を参照されたい。

9.3 injure/wound—意図性と無意図性

インフォーマント調査では、(11a) は良いが、(11b) は不可であるという報告がある (『英語教育』QB. 1988.5月号. 小西)。

- (11) a. He was *wounded* in the arm.
b. *He was *injured* in the arm.

確かに wound は (11a) の形で現れるのが普通である。この種の例は枚挙にいとまがない。

- (12) The officer, ..., was *wounded* in the shoulder during an exchange of gunfire with ... [WT 1991]

- (13) Mr. Birdzell was *wounded* in both knees in a gunfight with [WT 1991]

しかし、まれに injure が人を主語にした受動形の例もあるし、さらにその受動形に続く in... で体の部位を表す (11b) に類した例がないわけではない。

- (14) Washington, who was *injured* last Sunday, is scheduled for X-rays. [WT 1991]

- (15) The woman's 4-year-old son was *injured* in the leg by the explosion and [LA 1994]

これに対して、

- (16) a. ?He *wounded* his arm in the fight.
b. He *injured* his arm in the fight.

wound his arm は「自分で意図的に腕を傷つけた」という意味になるので、(16a) の形では使いくにくい。資料を見ても、(16b) は injure の用法としてはごく普通であるのに対して、(16a) は資料には出てこない。

- (17) Brian Lloyd, ..., *injured* his right knee. ... [LA 1994]

- (18) It continued when he *injured* his knee in the second game of the season, a loss to the Buffalo Bills. [LA 1994]

また、受動形を作ってみると、

- (19) a. ?His arm was *wounded* in the fight.
b. His arm was *injured* in the fight.

やはり、(19a) は普通ではない。(19b) の例はあるが、(19a) の例はない。

- (20) Perlitsh's arm was *injured*, which Romley said had just recently been operated on. [LA 1994]

- (21) Sheriff's deputies disputed that the ankle was *injured* and said there were indications that Cease had been drinking.

[LA 1994]

以上をまとめると、

- (22) He was *wounded* in his arm.
= He *injured* his arm.

の対応関係があり、この事実から、

- (23) a. ?His arm was *wounded*.
b. His arm was *injured*.

では (23a) が普通でなく (23b) が普通であるということが説明できる。

他動詞としての *wound* は、基本的に「主語の意志で、しかも何かの武器を使って (cf. *Activator*, s.v. *injure*) 傷つける」という意味をもち、無意志である場合は受動形になることによって表現される。あるいは、ある行為者が使った武器を主語に、*The bullet wounded him in the shoulder.* の形が可能である。これに対して、他動詞としての *injure* は、主語が被害者で、「主語が傷つけられる」の意味をもっていることがわかる。また、主語が無生物で、「主語が目的語を傷つける」の意味になることもある。この場合、(24a) の形が可能であり、(24b) がその受動形である。

- (24) a. *The explosion injured the boy in the leg.*
b. *The boy was injured in the leg by the explosion.*

wound と *injure* は同義語であるが、主語が行為者 (あるいは行為者が用いる道具) である *wound* と、被害者である *injure* という基本的な大きな違いが統語的な特徴となって現れている。

このように、意味の類似した語どうしても統語特徴では違いがでてくるが、それは多くの場合、意味特徴の反映である。

かつて Chomsky (1957: 101) が、一定の意味と形式の対応関係は認めるが、それらの対応関係があまりに不正確 (*inexact*) であるので、「意味は文法記述の基礎としては形式に比べて役には立たないだろう」 (“*meaning will be relatively useless as a basis for grammatical description*”) と述べたが、不正確さは意味の分析と形式との対応関係についての研究が不十分であることに由来するものである。

(第2章以下は『社会学部紀要』80に続く。)